

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 129 2024年10月18日発行



*** 2025年チェルノブイリ救援カレンダー お申込み受付中 ***

КАЛЕНДАРЬ НА 2025 ГОД (39 ЛЕТ ЧЕРНОБЫЛЬСКОЙ АВАРИИ)



2025 チェルノブイリ39周年救援カレンダー

制作●チェルノブイリ子ども基金

カレンダーの表紙:カルパチア山中での保養に参加したウクライナ・ジトミル州の放射能汚染地域の子どもたち

毎年好評をいただいている「チェルノブイリ救援カレンダー」2025年版が完成しました。今回も引き続き、子ども基金が支援する保養に参加したウクライナ、ベラルーシ両国の子どもたちの写真が使われています。戦禍と原発事故の二重の苦しみに直面するすべての子どもと家族に、平和な日常と笑顔が一日も早く戻るようお願いを込めました。今後の支援継続のため、みなさまのご協力をどうぞよろしくお願い致します。

★カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。

★お申し込み方法など詳細は10頁をご覧ください。チラシも同封しています。



ウクライナ・ジトミル州「オヴルチ子ども芸術アカデミー」への支援 (8～9頁)

保養に参加したベラルーシのさまざまな病気の子どもたち (5～7頁)



～～ 本号の目次 ～～

p.2～4	ウクライナ 子どもたちの夏の保養
p.5～7	ベラルーシ 子どもたちの夏の保養
p.8～9	オヴルチ子ども芸術アカデミー
p.10	2025年救援カレンダー
p.11	ウクライナ 内分泌研究所

p.12	ウクライナからの便り
p.13	「絵画と写真展」パレスチナとウクライナ戦禍の子どもたち
p.14	ベラルーシ「ナデジダ」創立30周年に際して
p.15	募金・救援状況
p.16	事務局から

放射能汚染地域に住む病気の子どもたちのための保養

2024年夏 ウクライナ・ベラルーシ

戦争の終わりが見えない不安な状況の中でしたが、ウクライナでは今年も同国西部の山あいにある施設で子どもたちの保養を実施することができました。ベラルーシは昨年に続き、日本からの送金に困難を伴いましたが、こちらも無事に子どもたちの保養を実施することができました。ただ残念ながら、2023年まで実施していた「チェルノブイリ事故被害者家族の保養」は資金不足により、実施を見送ることになりました。

ウクライナ

- 場所：子ども保養施設「リバー・キャンプ」
イワノフランクウスク州ミクリチン村
- 期間：2024年6月27日～7月6日（10日間）
- 参加者：子ども35人（8～17歳／ジトーミル州オヴルチ市、ナロジチ市と周辺の村より）、引率者3人
- 参加者の病名：慢性気管支炎、慢性扁桃炎、心臓疾患、咽頭炎、慢性膀胱炎、側弯症

「チェルノブイリの子どもたちの生存」

ザクレフスキー代表からの報告

【6月28日】 昨日の早朝、オヴルチの子どもたちを乗せたバスは、途中、ナロジチの子どもたちを乗せ、10時間後に「リバー・キャンプ」に到着しました。この日、イワノフランクウスク州で停電が起きました。因みに、キーウ（キエフ）市・キーウ州でも1日に数回、停電が起きています。しかしジトーミル州では停電はありません。

【6月29日】 カルパチア、ザカルパチア地域に電力を供給している火力発電所がロシアの攻撃で破壊されたため、リバー・キャンプでは1日に数

回停電があります。子どもたちの食事の準備は、自家発電で行われています。

<子どもたちの感想>

イリヤ・M 9歳 ナロジチ

チェルノブイリ子ども基金のみなさん、保養に招待してくれてありがとうございます。プールがとても楽しかったです。スタスが僕に泳ぎ方を教えてくれました。食堂の料理はとてもおいしいです。僕にとって最高の夏です。

ダリーナ・D 10歳 オヴルチ市

私はリバー・キャンプが大好きになりました。わくわくすることがたくさんあって楽しいです。新しい友だちがたくさんできました！私にとって世界で最高のキャンプです！今、ウクライナでは戦争が起きていて、空襲警報が出ると必ず避難します。よく停電します。私の国に早く平和が訪れることを願っています。

タチヤナ・M 12歳 ナロジチ

2022年は私に大きな変化をもたらし、深く傷つきました。2月24日、朝の5時、私は家の上を飛ぶロケットの轟音で目が覚めました。家族と一緒に地下に避難しました。そしてこれがただの



悪い夢であってほしいと思いました。この状況は私の心に大きな影響を与え、この世界に対する考え方が全く変わってしまいました。私はいつも不幸であると感じ、すべてが実際に起こっていることだと信じたくありませんでした。

リバー・キャンプは本当に素晴らしいです！この保養のおかげで、私の精神状態はとてよくなりました。美しい自然の風景の中で過ごし、いろいろなスポーツやゲームをして、歌ったり踊ったりして楽しみました。戦争の恐怖が始まって以来、これまでで最高の時間でした。来年もここで素晴らしい休暇を過ごしたいです！チェルノブイリ子ども基金に心から感謝します。

スタニスラフ・L 12歳 オヴルチ市

戦争の恐怖から離れ、心を休める機会をもらったことに感謝します。僕たちのことを忘れないでくれてありがとう。キャンプは本当に楽しかったです。僕たちはいろいろなところで遠足に行き、川辺や山の中を歩いたりしました。まさかカルパチア山脈を自分の目で見るができるなんて、思ってもいませんでした。すべてに感謝します。そしてみなさんは僕に、どんなにお金を出しても買えない貴重な贈り物をくれました。それは新しい友だちです。どうもありがとうございます。

ダリーナ・K 15歳 ナロジチ地区

ロシアの軍事侵略は、罪のない命だけでなく、世界の平和も奪いました。2022年2月24日午前4時、爆発音と、上空を飛ぶ飛行機やドローンの音



で目が覚めました。戦争状態での生活は、当時も今も非常に困難です。絶え間ない砲撃、毎晩地下室にこもり、電気が消え、水道が止まりました。体調は悪くなり、精神的にとて辛く諦め状態で、うれしいこと、楽しいことなど何もありませんでした。でも、リバー・キャンプで過ごすうちに、気分も体調も良くなりました。ここで過ごしながら私は再び喜びや満足感、心の平穏を取り戻すことができました。私を支えてくれる多くの友人と出会い、ここで過ごした日々は一生忘れないと思います。遠足に行ったり、プールで泳いだり、さまざまなイベントに参加したり、ただおしゃべりをしたりしていました。このような困難な時には、ただのおしゃべりで気を紛らわせることも、前に進むのに役立つと思います。

自分の目で山や美しい風景を見ることができてとても幸せです。リバー・キャンプは私にとっても一つの故郷となりました。不安から解放される機会をくださったチェルノブイリ子ども基金に深く感謝いたします。来年もリバー・キャンプに戻れることを願っています。

ミハイル・S 12歳 オヴルチ市

僕はオヴルチ子ども芸術アカデミーで木工細工の教室に通っています。戦争はウクライナの大地に多くの痛みと悲しみをもたらしました。でもみなさんのおかげで、僕たちは数日間これらの恐怖を忘れ、幸せな子どもの感情を取り戻すことがで



きました。素晴らしい保養に招待してくれたことに心から感謝します。戦争中にこのような保養ができたことは特別なものと感じられます。

ナザール・K 13歳 ナロジチ

みなさんの優しさと行動は僕たちに力と、より良い未来への希望を与えてくれます。戦争は僕たちに多くの悲しみと喪失をもたらしました。町や村は破壊され、普通の生活が壊され、多くの人が家や親戚を失いました。そのような中でみなさんのおかげでこうして休養することができたことに深く感謝します。この戦争の中でみなさんのご支援は、僕たちが独りぼっちでないことを思いおこさせてくれます。力を合わせればあらゆる困難を克服できると信じています。僕たちは力を合わせればどんな困難も乗り越え、平和を取り戻すことができると信じています。

アンナ・C 15歳 ナロジチ地区

私はベラルーシとの国境近くに位置するナロジチ地区にある村に住んでいます。2022年2月24日、私の人生は一変しました。戦争が始まってから数か月間、両親と私は定期的に地下室に避難し、全員が生きていて無傷であることを願っていました。その後、父は母と私をリヴィウ地方に避難させました。父は兵役に就いていたため、私たちと一緒に避難することができませんでした。

昨年夏も子ども基金の招待で保養ができたことにとても感謝しています。保養所にいる間、私は戦争から少しでも逃れることができ、自分がまだ子どもでいてもよいのだと感ずることができたか



らです。でも今年4月21日、兄が戦争で亡くなりました。両親を支え、自分のことも支えなければならなかった時、私は大人になったように感じました。今年も保養に来られてとてもうれしいです。またここに戻ってきたいと思います。

ユリヤ・T 15歳で ナロジチ

私は戦争の最初の日のことを一生忘れません。その瞬間から私の時間は止まりました。爆発、飛行機の音、占領の危険、親しい人たちの死…。両親と離れ、しばらくの間別の場所に避難しなければならないこともありました。言うまでもなく、誰も、ましてや子どもがこれを経験すべきではありません。

この保養に来たおかげで、日々起こっている戦争の恐怖から心を逸らすことができました。美しい自然に触れ、たくさんの新しい友人ができました。いろいろなところに遠足に行き、多くの新しいことを学びました。私たちのためにしてくださったすべてのことに感謝します。

アレクサンドラ・Z 16歳 ナロジチ

ロシア・ウクライナ戦争が始まり、私たちの日常は一変しました。当時私は14歳でした。朝の4時、激しい爆発音で目が覚めました。私は初め雷雨かと思いました。でもこれが雷雨でも冗談でもない時を知ったとき、とても怖くなりました。親戚や家族のことが心配でした。そして戦争の1年前から兵役に行っている姉のことがとても心配になりました。戦争が激しい時でも私はナロジチに留まり、どこにも避難しませんでした。

今回、このような保養の機会をくださったチェルノブイリ子ども基金に感謝します。ここに来て私は心を開放し、新しい友人を見つけ、ゆったりと過ごしました。保養指導員の人たちは、親切で優しく素晴らしい人たちです。仲間たちと共に楽しい時間を過ごしています。私がこのキャンプで過ごした時間は、戦争が始まってから今までの中で最も充実したものでした。素晴らしい日々感謝します。またここに戻ってきたいです。「リバー・キャンプ」は最高です！

ベラルーシ

■場所：子どもリハビリ・健康回復センター

「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区

■期間：2024年8月2日～8月20日（19日間）

■参加者：子ども29人（9～17歳／ゴメリ州ゴメリ市、ゴメリ地区、レチツァ市、チェチェルスク市、ドーブルシ市、モーズィリ市）、引率者2人

■参加者の病名：筋線維芽細胞腫、出血性脈管炎、腎臓がん、精巣がん、卵巣がん、横紋筋肉腫、目の腫瘍、悪性リンパ腫、肝臓がん、後腹膜神経芽細胞腫、線維肉腫、骨肉腫、血小板減少性紫斑病

保養に参加したのはベラルーシのNGO「困難の中の子どもたちへ希望を」に所属しているさまざまな病気の子どもたちです。初めて参加した子どもは2人、日本の里親から支援を受けている子どもは11人参加しました。

ソコロワ・K（小児科医）

子どもたちはみな腫瘍病、血液病、リンパ系の病気です。手術、治療（化学療法、照射療法）後で症状が落ち着いています。全員が免疫力の落ちた状態ですので、療養治療と食事、適度な運動をすることで、免疫力を高める必要があります。到着後に診断を行い、それぞれの体調に合った療養治療計画（マッサージ、水治療、アロマテラピー、薬草茶、療養体操、岩塩療法）を作りました。子どもたちは保養期間中、この計画に従って治療を受けました。

ルスラン（17歳）は2歳で腎臓がんと診断され摘出手術を受けました。残っている腎臓は慢性腎盂腎炎。他にも高血圧症、色覚異常、足の関節に問題を抱えています。マッサージ、酵素カクテル、アロマテラピー、水治療を受けました。ほとんどの子どもも同様に、腫瘍病以外の疾患があります。アレクサンドラ（12歳）は、甲状腺にも問題があり、慢性胃炎を患っているため、効果のある薬草茶とアロマテラピー、ニキータ（16歳）は背骨に問題があるためマッサージ治療を、ミハイル（17歳）は喘息のため岩塩療法を受けました。

アブラモワ・N（教育担当）

各地域から、さまざまな年齢の子どもが参加しました。何度も参加している子どもや年齢が上の子どもたちは、初参加の子や小さい子どもたちがセンターでの生活に慣れるように助けていました。

初め、心理カウンセラーと共に、お互いを知り合うためのゲームが行われました。その後も何度かゲーム形式のグループカウンセリングが行われました。これらはお互いの信頼関係を高める効果がありました。病気のために、子どもによってはスポーツをするのに制限があったり、体調が優れなかったり、気分が落ち込んだり、または反対に神経が昂るようなこともありました。心理的問題を抱えている子どもには個別のカウンセリングも行われました。日を追うにつれて子どもたちはここでの生活に慣れ、お互いに心を開き、協力し合い、各種イベント、環境問題や健康に関するコンクール形式の催しや屋外で行われるゲームなどにも積極的に参加するようになっていきまし



た。大変仲が良く、あたたかい雰囲気ของกลุ่มになりました。

天気の良い日には近くにある人造湖に足を運び、水浴びを楽しみました。またフィールドアスレチックにも挑戦しました。このように、楽しみながら野外で体を動かすことは、精神的な健康にもよい影響を及ぼし、免疫力を高める効果があると思います。また子どもたちはクラブ活動（陶芸、絵画、手芸、木工細工、革細工、折り紙、シンセサイザー等）にも喜んで参加しました。年齢の高い子どもたちには木工細工の教室が人気でした。小さい子どもたちには陶芸と手芸教室が人気でした。保養の終わりにはそれぞれの作品が展示されました。最後に行ったアンケートでは、子どもたち全員が、「ナデジダでの保養は楽しかった。またここに来たい」と書いていました。そしてさらに保養に招待してくれた子ども基金と、私たちナデジダの職員に対するお礼の言葉もありました。

<子どもたちの感想>

マクシム・Z 16歳 ゴメリ市

ナデジダで保養をしたのは今回で5回目です。毎回僕はこの保養をととても楽しみにしています。今年も、新たな素晴らしい友だちがたくさんできました。僕たちのグループはとても明るく、コンクールやゲームなど、すべての催し物に参加しました。そして、食堂の料理はなんと美味しかったことでしょう！ またそれぞれの健康回復プログラ

ムはレベルが高く、特に酸素飲料とマッサージがよかったです。それから一番楽しかったのは木工細工のクラブ活動でした。毎年、自分の手で作った作品を家に持ち帰っています。こんな素晴らしい保養をさせてくれたみなさん、ほんとうにありがとうございます。

ソフィヤ・E 10歳 ゴメリ市

チェルノブイリ子ども基金のみなさん、こんにちは。ナデジダで保養ができたことはとても幸せでした。私はナデジダが大好きになりました。私たちのグループが到着すると、お医者さんが診てくれて、それぞれの健康回復プログラムを作ってくれました。私は、マッサージ、アロマテラピー、体操、薬草茶でした。食事は毎回いろいろなメニューでとても美味しかったです。それからナデジダにはいろいろなクラブ活動があります。私は折り紙、手芸のクラブに参加しました。私にはたくさんのお友だちができて、みんなで楽しく過ごしました。

イリーナ・T 9歳 ナロヴリヤ市

ナデジダの食堂の料理はとても美味しく、私はその中でも特に、リンゴとシナモン入りのプリンチキ（クレープ）が大好きでした。それから『感覚の小径』（様々な大きさの小石、草などが敷き詰めた上をはだして歩く、足裏マッサージのようなもの）の上を毎日歩きました。それから、敷地



の林の中でキノコを採るのが面白かったです。そこにはたくさんキノコが生えているのです。ナデジダの保養に招待してくれて本当にありがとうございます。

ボグダン・K 16歳 ゴメリ市

日本のみなさんに心からお礼を申し上げます。みなさんのおかげで僕たちは、きれいな空気と美しい自然に囲まれ、素晴らしい設備のあるナデジダで保養をすることができました。僕は今年で3回目の参加なので、グループの中には旧知の友人がたくさんいます。またナデジダの先生やお医者さんたちは僕のことをよく知っています。僕たちはとても仲のよいグループでした。食堂は毎回とてもおいしい料理が出ました。いろいろなクラブ活動の中で、特に木工細工が楽しかったです。木の板の上に電動ペンで焼き付けながら絵を描いていくのです。それから敷地内にあるハンモックでくつろぐのが大好きでした。ナデジダはいつも僕に忘れることの出来ない思い出を残してくれます。僕たちをナデジダで保養させてくれたみなさん、ほんとうにありがとうございます。

*ボグダンは母子家庭でしたが、2歳のときに母親が脳腫瘍で亡くなりました。その後、祖母によって育てられ、里親支援を受けていた時期には、事務局の佐々木が自宅を訪問しました。しかし昨年祖母が病気で亡くなりました。ボグダンには他に身寄りがなく未成年のため孤児院で暮らしています。NGO「困難の中の子どもたちへ希望を」のスタッフたちは彼を大変気の毒に思い、物資などの支援を続け、今回の保養にも招待しました。



ベラルーシの子どもへの支援について

ロシアのウクライナへの軍事侵攻以来、ロシア同盟国のベラルーシも経済制裁を受け、日本からの送金が一層難しくなったことは、前号でも報告しました。いろいろな方法を試みましたが、直接の送金は無理であると判断しました。その後、保養施設「ナデジダ」の共同経営者であるドイツのNGOの協力を得て、NGO「困難の中の子どもたちへ」宛の支援金を送金することができました。送金の手続きを開始したのは5月の初めでしたが、「困難」の口座に入金したのは8月になってからでした。さらに様々な書類を準備しなければならず、その後当局によるチェックが入り、実際に支援金を引き出せる許可が出たのは10月4日でした。この後ようやく、それぞれの家族に支援金が渡されます。私たちは、今もなお病気に苦しむ子どもたちのために出来る限りの方法で支援を続けていきます。

NGO「困難の中の子どもたちへ希望を」 代表 ポホモワ・V

5月にチェルノブイリ子ども基金に支援をお願いしていたステパン（13歳）の体調が悪化してしまいました。彼は昨年7月に脳腫瘍と診断され、放射線照射治療を受け、今年5月からは抗がん剤治療を受けていました。しかし今ステパンは、小児がんセンターの集中治療室で人工呼吸器を着けています。両親は医師から、もう回復の見込みはない、と言われたそうです。私はこれまで何度もこの家族と会って話をしてきました。重い病気の子でもでしたので、日本の里親の方の支援をお願いしたいと思って準備してきました。ですからこの事実を知った時、とても悲しく、残念で、涙が出ました。

さらにステパンの姉（29歳）は、昨年5月に乳がんの手術を受け、抗がん剤治療が続いています。彼女は10歳の時に白血病を発病し、その後長い治療を経て寛解していました。

【2024年9月3日】

ウクライナ オウルチ子ども芸術アカデミー

オウルチ子ども芸術アカデミー（ジトーミル州オウルチ市）の授業で使用する材料費の支援を行いました。購入品の領収書と共に、手紙と写真が送られてきました。子ども基金はこれまでこの学校に通う子どもたちを夏の保養に招待し、クリスマスプレゼントを贈っています。

チェルノブイリ子ども基金のみなさん、子どもたちが使用する品物購入のためのご支援をいただき、まことにありがとうございます。校長の私は、子どもたちが授業で使用する材料の購入資金について、いつも頭を悩ませていました。みなさんがご存知の通り、私たちの国では戦争が続いています。資金というのはすべて防衛のため、建物の修理や、警報が鳴った時に避難する場所（それが無いところに）を作るためなどに使われています。

ここでは約 85 人の子どもが絵画、ガラス絵、木工細工、わら細工を学んでいます。みなさんのご支援のおかげで、この子どもたちが授業で使うのに十分な量の材料を購入することができました。絵画教室には、絵の具、筆、画用紙、留めテープを購入しました。木工細工の教室には、ナイフを研ぐための電動器具を購入しました。これにより細かい作業がよりやり易くなります。わら細工の教室には、はがれにくく、その上、健康に害を及ぼさない原料で作られている接着剤、そして専

用のハサミを購入しました。以前からこのようなものが必要だと思っていました。素晴らしい品物を買うことができたことに、本当に感謝しています。

9月1日～15日、私たちは新たな生徒の募集を行いました。見学に来た子どもたちに、ここでどのような作品を作っているのか、他にどのような活動をしているのか、映像も見せながら話しました。特に子どもたちが反応したのは、クリスマス会にはプレゼントがあり、カルパチヤに保養に行く機会があるということでした。

オウルチの子どもたちは、全員がチェルノブイリ事故による被害者です。しかし保養には定員があるため、学校に通う全員の子どもの行くことはできません。そこで、授業を通して自分自身の能力を高めた子ども、コンクールで入賞するなどの成果を出した子どもが優先的に保養に行けるようにしました。子どもたちは、一生懸命自分の課題に取り組みます。これは作品を作る上でも、とても良い効果があります。さらに孤児院で暮らしている子どもも優先的に保養に行けるようにしています。

子ども基金のみなさん、募金をしてくださった日本のみなさん、子どもたちへのお心遣いにご支援に心から感謝しています。



写真左：スタニスラフ・R 色の豊富な新しい絵の具を使って描いた。タイトルは「冬」

写真右：新年度、最初の教室にて。テーブルの上には子ども基金の支援で購入した新しい絵の具や文具類。

戦争中の私たちの生活について少しお話しします。ミサイルやドローン攻撃のある中で暮らすのは、本当に恐ろしいことです。空襲警報は1日に何度か発令されます。保育園、学校、病院も攻撃されます。私たちはこのような状況にあります。希望はただ、私たちの軍隊と、日本を含む友好国からの支援だけです。

みなさんに心から感謝いたします。私たちの交流がこれからも続きますようお願いしています。ありがとうございます。

2024年9月13日
校長 N・クリモヴィチ



写真上：ダリーナ・P 新しい筆を使ってガラスに絵を描いているところ。

写真下：ソフィヤ・K 新しい絵の具で描いた完成したばかりの絵。

～ 子どもたちが描いた絵 ～

13頁に掲載の『「絵画と写真展」パレスチナとウクライナ戦禍の子どもたち』では、この学校の子どもたちが描いた絵も展示されました。



イリーナ 13歳
『私の一番大事なものを、それは私の手の中に』



ミコラ 16歳 『戦争と平和』



ヴィクトリヤ 14歳 『私の家はウクライナ』

2025年チェルノブイリ39周年救援カレンダー

～チェルノブイリと福島の子どもたちの救援にご協力ください～

2022年2月に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻により、事故被災地域に暮らす子どもたちや、長年被害に苦しむ人々はさらなる苦難に直面しています。一日も早くすべての子どもと家族に平和な日常と笑顔が戻ることを願い、2025年救援カレンダーを制作しました。このカレンダーの写真は、私たちが支援する保養に参加した子どもたちの様子を写したものです。

カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。2024年版の収益は73万円でした。今後の支援継続のため、みなさまのご協力をどうぞよろしくお願い致します。



定価 1,000 円 送料：9部まで200円、10部以上300円

- お申し込み方法：E-mail、Fax、または郵送でお申し込みください。
- お支払方法：お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください。
- カラー、サイズ：縦 30cm× 横 21 cm (見開き A4 サイズ)
- 写真提供：ウクライナ「チェルノブイリの子どもたちの生存」
ベラルーシ「子ども健康回復センター 希望」
- デザイン：川島進デザイン室 ●発行・制作：チェルノブイリ子ども基金

<定価と送料につきまして>

2024年版は「定価900円、送料9部まで200円、10部以上は1部800円/送料無料」で販売しました。しかし制作費、送料の値上げに伴いまして、まことに心苦しいのですが、2025年版は上記のように値上げをせざるを得ませんでした。ご理解いただけましたら幸いです。

※すでにご注文をいただいている方にもチラシを同封しています。順次発送致しますので少しお待ち下さい。

ウクライナ 内分泌研究所

甲状腺患者のための医薬品支援

*** ご協力のお願い ***

甲状腺の患者の手術と治療を行っている内分泌研究所（キーウ市）に対し、子ども基金は長年にわたり医薬品や医療機器の支援を行っています。

子ども基金の支援により 2023 年に購入されたチロキシン（甲状腺ホルモン剤）3,310 箱は、すでに 1,200 人の患者が受け取っており、8月5日時点で残り 158 箱になっています。この薬は、甲状腺手術後の患者にとって生きていくのに欠かすことのできないものです。資金が集まり次第、年内に追加の購入費用を送金したいと考えています。みなさまのご協力をぜひよろしくお願いいたします。

NGO「チェルノブイリの子どもの生存」代表ザクレフスキーさんより、この病院で手術を受け、治療を続けている二人の患者さんについて報告が届きました。写真で手にしているのは子ども基金のシールが貼られた医薬品です。

ナタリヤ 1981 年生まれ キーウ（キエフ）市

幼少期の健康診断で甲状腺の軽度の肥大（甲状腺腫）が見つかり、その後は2年に1回超音波検査を受けてきた。2020 年、甲状腺に3つのリンパ節が見つかり、同年、内分泌研究所で手術が行われた。それ以来、彼女は放射線核種診断部門で年に2回検査を受けている。



戦争が始まってからも、彼女はずっとキーウで暮らしている。子ども基金の資金援助により、私たちが2022年2月中旬、戦争開始の1週間前に速やかに内分泌研究所のためにチロキシンを購入したおかげで、戦争の最も困難な最初の数か月間、彼女はこれらの薬を受け取ることができた。さらに彼女は、キーウの物流封鎖によりそのような薬が手に入らなくなった病気の友人を助けたこともあった。そして5月末、ナタリヤは子ども基金の支援による新たなチロキシンを同研究所から受け取ることができた。

（左下写真：ナタリヤと看護師長オクサーナ）

エレナ 1983 年生まれ ヴォルィニ州コヴェリ市

チェルノブイリ事故当時も現在も、コヴェリ市に住んでいる。9歳の時の健康診断で甲状腺肥大が見つかった。2002年、19歳の時に、同州ルーツィク（ルーツク）市の病院で2度の甲状腺手術を受けた。手術は上手くいかず、同年、内分泌研究所で再度手術を受けた。それ以来、放射線治療部門で定期的に放射線治療を受けた。さらに2023年にも手術を受けた。現在彼女は入院治療を勧められている。

2022年、戦争が始まった時、彼女は適切な時期に甲状腺ホルモンを受け取ることができなかった。当時ウクライナでは医薬品を配送する物流上の問題が起きていた。そのため彼女は、ポーランドからチロキシンを買ってきてもらうよう知人に頼まなければならなかった。現在は常に内分泌研究所からチロキシンを受け取っている。



ウクライナからの便り

NGO「チェルノブイリの子どもたちの生存」

代表 ザクレフスキー

◆7月10日

6時間にわたる停電の後、真夜中にようやくコンピュータの電源を入れることができました。ウクライナではここ数週間、30度を超える暑さが続いています。この天気に加え、多くのエネルギー施設が被害にあっているため、キーウ（キエフ）の家庭やさまざまな施設では1日10～12時間電気が遮断され、私たちは扇風機やエアコンのないコンクリートの建物で過ごしています。

7月8日の朝、子どもたちの保養の感想をまとめてあなたにメールを送信していた時、突然窓の外から大きな音が数回聞こえました。初めは雷かと思いましたが、空は晴れ渡っていました。窓から見ると、私の家から5～7キロ離れた隣の地区の住宅地に煙の柱が上がっていました。その後、ウクライナの中心部にある主要小児病院の手術棟に高精度ミサイルが直撃したことをインターネットで知りました。ウクライナの軍事専門家は、この特定の病院がミサイル攻撃の標的であることを確認しました。キーウの他の医療施設や住宅、他の施設にも数件の被害があり、30人以上の市民が死亡しました。ウクライナの他の大都市でも死傷者が出ました。

◆9月6日

このところのキーウの様子についてお知らせします。まず、記録的な暑さ、さらに空襲警報が非常に多く発令され、夜間はミサイルやドローン攻撃に対する迎撃のための轟音が響いていました。そして長時間にわたり停電が起きました。これらのことは生活に大変支障をきたしますが、人々はすべてのことに慣れていきます。

1日に3～4回の空襲警報が出されたとき、私は内分泌研究所（11頁参照）の医師に、患者たちはこのような時にはどうしているのかと聞きました。すると、「患者たちはただ放射線診断部門の地下室に避難するだけです」と落ちていた声で答えました。

オリガ（36歳）ジトーミル

◆8月8日

長い間連絡をしていなくてごめんなさい。2日前に夫がまた入院することになりました。夫のためにできることは何でもするつもりです。こちらもとても気温が高くなってきました。私は暑さが苦手です。病院、薬局、店など、あちこちに行かなければなりません。時々暑さで歩いているだけで体が辛くなります。でも大丈夫、心配しないでください。何とかできます。私が頑張らなければ、と思っています。

◆8月31日

夫が退院しました。病院での治療で少し良くなりました。今は回復のために食事などとても気をつけなければなりません。そしてまたたくさんの薬も飲まなければなりません。彼の気分が少しでもよくなるよう励まし、一緒に近くの林を散歩したりしています。林の中はとても静かで心が落ち着きます。

今ウクライナへの攻撃はとても激しいものになっています。空襲警報が度々発令されて、ストレスがたまり、よく眠れません。でも私たちはこの状況で生きていくことを学んでいます。

6月末、私は幼馴染のオクサーナ（前号掲載）と会うことができました。彼女はイギリスに避難しているのですが、実家に帰ってきているところでした。数年ぶりに彼女と会えて本当にうれしかったです。

来週から私は町の図書館で働くことになりました。短時間の仕事で収入も少ないので、別の仕事も探したいと思っています。暑さもあり、自分自身の体調も思わしくありません。

子ども基金の招待で海に保養に行ったことがとても懐かしいです…。とにかく、状況が良くなることを信じています。

*オリガさんは幼少期に甲状腺の手術を受け、十代の頃に子ども基金の保養プロジェクトに参加していました。当時はウクライナ南部ニコライウ（ニコラエフ）州の海辺で保養を行っていました。

「絵画と写真展」パレスチナとウクライナ戦禍の子どもたち

2024年8月27日～9月1日 名古屋市民ギャラリー栄

ロシアのウクライナへの軍事進攻、イスラエルとガザ地区の戦争は泥沼化しており、隣国のレバノンにも攻撃を広げその報道には目を覆うばかりです。死傷者の多くはいつも弱い立場の女性と子どもです。戦争を終わらせることができなくても、食糧や医療など命がけの人道支援はどうしても必要なのです。ゆとりも無く思うように進まない世の中ですが、いま私達は命の危機がなく絵を見ることができます。ゆっくりと見て遠い国のことではなく、身近にあることとして捉え、平和の尊さを考える機会として絵画写真展覧会を行いました。

森佑一さん(39)の写真は、2022～2023年にウクライナで爆撃やミサイルを避けて暮らす人々を暖かいまなざしでみつめた写真、16点を展示。戦禍の子どもたちが描いた絵は、チェルノブイリ救援中部(名古屋市)、チェルノブイリ子ども基金(東京)、パレスチナ子どものキャンペーン(東京)を通じて支援している現地の学校などから160点の絵を借り受け展示しました。

ウクライナの子どもの絵は、放置された大砲の先にロープを吊るしブランコ遊びをする子どもたち、愛らしく描かれた犬はペットではなく地雷探知犬など。周囲を壁やフェンスで囲まれ天井のない監獄と言われるガザでは、おびえてシェルターの中で暮らす家族、フェンスの外の世界へのあこがれ、破壊された街など。閉じ込められた心。子どもたちの絵からは、すべてが不足している紛争地の生活、厳しい生活の中でも努力しようとする気持ちの一端を見ることができます。戦禍の中で子どもたちが絵を描いて表現することで、少しでも心のつらさや苦しみを和らげることができればと願います。

始まってしまった戦争を止めることはどんなに難しいかを私たちは知らされました。絵を描いた子どもたちの思いを受け止めて、悲惨な戦争を体験した人たちは、自分たちのような苦しみを持つ人を二度とつくってはならないと誓い、平和を願う人たちは、絶対に戦争はしないと誓います。そして志を持った人たちの行動は受け継がれ、非核に向けて米国を説得する行動へとつながってほしいと思います。

会期中は停滞した台風の直撃を受け、テレビやラジオは不要不急の外出はしないようにと繰り返し放送され、残念ですが来場者は抑えられました。それでもチェルノブイリ子ども基金の呼びかけや新聞に取り上げられたこともあり、最終日には「今日で終わりですね。観ることが出来て良かったです」と声をかけてくださる方もあり、力をいただきました。

非核平和を求める写真絵画展事務局 杉浦展子



参加者の感想 ◆ウクライナとガザの問題が同時に取り上げられるのは大切だと思います。戦争を早くやめさせたいです。◆子どもの絵を通して戦争の残酷な面、理不尽さを痛感しました。絵や写真に解説があり、より作品や写真の意味がわかりました。◆どの子ども戦争が終わってほしいという強い願いを持っていると感じました。ここで感じたことをたくさんの方々に伝えていきたいと思います。◆戦争によって日常の生活が破壊され、子ども達の描いた絵にも心の傷が反映しているように思われた。◆「戦争は子どもに必要な。子どもは生きる権利がある」と、絵とともに書かれたのを見て、本当に子ども達が犠牲になっていることが悲しく悔しい。ロシアに占領されていた村や街の人々の写真を見て記事を読み胸が詰まった。◆写真から現地のリアルさがとても伝わりました。日本は欧米の言いなりの外交をするのではなく、日本独自の外交により、当事国同士の仲裁を進め、終戦の方向に舵を切るべきです。もうこれ以上両国の尊い人々の命を無駄にはいけない。戦争を長引かせたい勢力がいることを、多くの人々は知るべきだと思います。◆戦争を続ければ、それだけ多くの人々の命や心が奪われていきます。一刻も早い停戦、そして終戦を願っています。

ベラルーシ 子ども健康回復センター「ナデジダ」創立 30 周年に際して

ベラルーシとドイツの NGO により設立・運営された子ども健康回復センター「ナデジダ」が、今年 30 周年を迎えました。私たち子ども基金も、開設当初から海外パートナーの一団体として協力をしてきました。これまでに建設費用の一部の支援、医療機器、医薬品、楽器、スポーツ用品、文具などの支援を行ってきました。また、この施設で毎年保養プロジェクトを行ってきました（5～7 頁参照）。子ども基金は 30 年前の開設時、10 周年、20 周年の記念式に参加しました。今年 30 周年にも招待されましたが、戦争の影響を考え参加を辞退しました。ナデジダは共同運営者のドイツの NGO を招待しましたが、当局の許可を得られなかったとのことです。開設時から所長を務めてきたマクスンスキー氏が、健康上の理由で所長を辞任することは予め知らされていましたが、最後に次のような手紙が届きました。

2024 年 9 月 24 日、「ナデジダ」は創立 30 周年を迎えました。チェルノブイリ原発事故で被災した子どもたちを支援するために特化した専門施設をベラルーシの地に作るという、ベラルーシとドイツ両国の代表者たちが描いた構想に基づき創設されたものです。「ナデジダ」のプロジェクトの成功が長年続いてきたことは、お互いに共通の目標と価値観をもち、対等な責任ある協力関係を築いてきた各国 NGO のパートナーがあつてのことです。これまでチェルノブイリ原発事故で被災した子どもたち、様々な疾患の子どもたち（小児がん、甲状腺疾患、血液疾患など）のための、数多くの療養・保養プロジェクトが実施されています。この間、私たちは常に共にあり、互いに支える関係であればこそ、様々な困難にうまく対処することが出来ました。「ナデジダ」を支えて下さったすべてのみなさま、私たち、そして我が国の若い世代の人々に、より良い未来への希望を与えて下さったすべてのみなさまに言い尽くしがたい感謝の念を抱いています。

しかし近年、ベラルーシ・ドイツ共同プロジェクトとして「ナデジダ」の活動を行うにあたり、さま

ざまな変化が生じてまいりました。「ナデジダ」の政府側、及び非政府側参加者たちの間にあった、これまでのような協力関係が変化したことにより、ドイツ国内の 9 つの社会団体が参加する「子どもセンター“ナデジダ”の友人たち・ドイツ」と、ベラルーシ・ミンスク市の社会環境団体「真のパートナーシップ」という 2 つの非政府組織の参加者が、有限合併社会団体「子ども健康回復センター“ナデジダ”」の参加メンバーから離脱し、センターの出資基金における自身の出資分をベラルーシ共和国に譲渡するという苦渋の決定を下すに至りました。

さらに私自身、2024 年 10 月 1 日で「ナデジダ」の所長を辞任することとなりました。30 周年の記念の時を迎えながら、このようなことについてお伝えしなければならなくなりました。しかし私たちは様々な病気を抱えた子どもたちの保養プロジェクトを実施するための協力関係がこれからも続き、「ナデジダ」に子どもたちの明るい声が響き続けることを期待しています。

未来はきっと良くなるという信念と希望を忘れずに胸に秘め、子どもたちに、そしてお互いに愛を贈り、善を届けることにしましょう！

みなさまのご多幸を願いつつ

マクスンスキー・V
ベラルーシ・ドイツ有限合併社会団体
子ども健康回復センター「ナデジダ」所長
2024 年 9 月 24 日

ドイツとベラルーシの NGO がナデジダから離脱することになってしまったのは、大変残念なことです。子ども基金としては、ナデジダ側が困難な状況の中でも引き続き子どもたちのために尽力するのであれば、支援を継続していく考えです。ベラルーシの NGO 「困難の中の子どもたちへ希望を」については、会員の病気の子どものための保養支援を可能な限り続けていきたいと思えます。送金に困難もありますが、このような時だからこそ日本からの支援を絶やさず、何とか継続の方法を探っていきます。



募金・救援状況



●募金状況 2024年6月～9月 (単位:円)

	6月	7月	8月	9月
募金件数	23	145	63	22
救援寄付金	154,250	586,593	799,606	77,600
保養費	15,000	99,800	28,000	5,000
里子支援	0	0	1,676,924	51,300
ウクライナ支援	23,000	162,000	19,000	27,300
ニュース購読費	16,000	88,000	12,120	4,000
合計	208,250	936,393	2,535,650	165,200

上記の他、切手、プリペイドカードのご寄付をいただきました。
ありがとうございました。

●救援状況 2024年6月～9月 (単位:円)

<ウクライナ>	
◎チェルノブイリの子どもたちの生存	
里親支援 (半年分×5人)	236,561
緊急支援 (半年分×3人)	139,782
◎オヴルチ子ども芸術アカデミー	
画材、文具代	50,171
<ベラルーシ>	
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
医薬品代	2,360,871
団体運営費	531,369

*** 販売品 ***

- ◆マトリョーシカのマグネット 各 500 円
マトリョーシカのキーホルダー
 - ◆ベラルーシ製リネンクロス サイズ 49cm×70cm 800 円
- ※送料別 (実費): 子ども基金HPに画像を掲載しています。

♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

8月 奥中山教会、イエスキリスト教会祈りの家

9月 非核・平和を求める写真絵画展事務局

～みなさまからのメッセージ～

◆6月1日講演会にオンラインで参加しました。皆様の支援活動も大石芳野さんの写真家としての活動も長く続けられていればこそその力を、子どもだった方々が成長され大人になった姿を見て心に沁みました。(Sさん)
◆戦争を起こすことにも、制裁が病に苦しむ子ども達にまで及ぶことにも憤りを感じざるをえません。その苦労の中で子ども達を支える活動を継続してくださっている基金の皆様に感謝しています。(東京都Sさん)
◆ベラルーシへの送金について粘り強く動いてくださりありがとうございました。ドイツNGO経由で送金できて良かったです。戦争が公共事業であるアメリカの言いなりで、日本政府はどんどん軍事予算を増額しています。ベラルーシは他人事ではない、と思います。(大阪府Tさん) ◆アリス・ポータ著『私たちのベラルーシ』を読んだところです。支援が大変なご苦労であろうことを改めて認識したところです。(愛知県Nさん)

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1) 郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2) ゆうちょう銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキキン

(3) 三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金



事務局から

■チェルノブイリの子どもの絵画について

9 頁、13 頁に掲載の子どもの絵画展の開催にご興味をお持ちの方は、以下へご連絡をお願いいたします。ウクライナでの開戦後に描かれた絵だけでなく、チェルノブイリ事故当時の子どもが描いた絵も所蔵しています。

★「非核・平和を求める写真・絵画展事務局」
連絡先：0561-58-7568(杉浦)

■「基金ニューズレター」について

ご寄付をくださった方に、使途の報告としてニューズレターをお送りしています。ニューズ購読費(2,000 円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

※ニューズレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。

※ニューズ発送経費を節約し、なるべく多くのお金を子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思っております。そのため長期間、募金・カレンダー購入などのお振り込みがない方へのニューズ発送は停止とさせていただきます。事情をご理解いただけましたら幸いです。

■ボランティア募集

ニューズ発送作業(年 3 回:2・6・10 月):お手伝いいただける方を募集します。次回は、2025 年 2 月中旬の予定です。詳細は事務局へお問い合わせ下さい。
場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※参加ご希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前 10 時～午後 5 時。留守の場合は伝言をお願いします。

★編集後記★

ウクライナの「オヴルチ子ども芸術アカデミー」(8・9 頁参照)には 9 月末で 101 人の子どもが通っているそうです。「みな喜んで創作活動をしています。子ども基金のおかげです」という連絡がありました。

戦争の影響が、ベラルーシの子どもセンター「ナデ

** ご協力いただいているみなさまへ **
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便振込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収証がご入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

~~~~~  
ジダ)にも及んでいます(14 頁参照)。共に活動してきた外国の NGO も自国の NGO も窮地に立たされました。子ども基金と常に連絡を取り合っている職員は言います。「私たちは各国の NGO とこれからも協力し合い、子どもたちの保養活動を続けていきたいと思っています。私自身、所長が変わっただけでなく、組織上の変化にとっても不安を感じています。でも、それらがみな徐々に改善され、これまで通りのナデジダであり続けることを願っています。」

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年 3 回(2・6・10 月)発行●

住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>



※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。